

〈史料紹介〉

「梅颯御供」の翻刻と解説

小竹 佐知子、大久保 恵子

一. 史料「梅颯御供」について

本稿では頼梅颯（通称 静子、一七六〇（宝暦一〇）年八月二十九日～一八四三（天保一四）年二月九日）の五〇日祭・忌明までに毎日供えられた膳の献立「梅颯御供」の翻刻および解説を行う。梅颯は、江戸時代後期に広島藩儒に登用された頼春水（一七四六～一八一六年）の妻であり、『日本外史』を著した頼山陽（一七八〇～一八三二年）の母として知られている。

呼称「梅颯御供」は、頼家一〇代惟勤（お茶の水女子大学名誉教授、一九二一～一九九九年）が著者らに遺したメモ書き「聿庵詩稿」一東ノ中ニ梅颯様御供3冊」に由来する（一九九五年当時）。聿庵（通称、余一）は山陽の息子で、春水―梅颯にとっては孫にあたるが、山陽廃嫡後の養嗣子景讓（春水甥）の死去に伴い、最終的に聿庵が頼家を嗣ぐことになった¹⁾。聿庵にとって梅颯は本来祖母なのだが、実生活においては母であり、また、商家から儒家となった頼家の主婦として不可欠な存在であった梅颯の喪の行事は、当主聿庵にとって重要

であったと推測できる。献立冊子（頼山陽史跡資料館所蔵）は表紙に「朝夕奠御献立 上・中・下」と書かれた、三分冊になっている。「梅颯御供」の他に、頼家には先祖忌祭および時祭の献立が多数残っており²⁾、これらの各献立には、前出惟勤氏により資料整理番号が割り当てられている。一方、「梅颯御供」献立には番号は振られておらず、惟勤氏による「未加番」のメモ書きも遺されていることから、「梅颯御供」の資料整理は行われなかったことがうかがえるが、幸なことに、梅颯死去の翌々日の一月二日から一月二九日までの四八日間の膳の献立が順番に綴じられており、資料の散逸・欠損などはみられない（表1）。

二. 献立内容

「梅颯御供」は三冊あわせると全部で五二丁から成り、梅颯没後二日目の発引（出棺）の日から膳の記録が残されていた。発引の日には朝奠と夜祭奠の二膳のみであったが、それ以降は朝奠、午後奠（午奠）、夕奠の三膳が供えられた。朝奠は猪口、御汁、御平、御飯、御香物、御酒あるいは御湯の膳構成が主であった。午後奠には菓子と茶が供えられていた。また、夕奠は朝奠の膳にさらに御向詰、御肴が加わったものが主であった。この膳供物をおこなう五〇日間近くの時期は、ちょうど年中行事の年末および正月にあたっており³⁾、そのため、供物食品のなかには、雑煮、七草粥、小豆粥などがみられた。